

【全国戦没者追悼式】

○全国戦没者追悼式 衆議院議長追悼の辞（平成22年8月15日（日）、日本武道館）

天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぎ、全国戦没者追悼式が挙行されるにあたり、謹んで追悼の辞を申し述べます。

あの日、真夏の太陽がカッカと照りつけ、セミがしきりと鳴いていた、烈日の下に戦争に敗れたことを知らされたと、ある作家は書き残しています。それから六十五年の歳月が経ちました。

太平洋の海原で、アジアの山野で、シベリアで、広島長崎沖縄で、そして空襲下の国内各地で、三百万余りの同胞が亡くなられたことを思い返すとき、その痛ましさにいまなお胸にこみあげるものを禁じえません。近隣諸国あわせて、二千万人といわれる犠牲者の方々。その惨禍の大きさに茫然自失するほかありません。

国の内外すべての戦禍に斃れた方々の御霊に衷心より哀悼の誠をささげますとともに、最愛の肉親を失い、悲しみと苦難の戦後を生き抜いてこられたご遺族のみなさまに、お悔やみを申し上げます。

戦没学生の手記を編んだ「きけわだつみのこえ」の本のなかに、「死んだ人びとは、還ってこない以上、生き残った人びとは、何が判ればいい？」という言葉があります。

私は、戦没者二百四十万人のうち、まだ百十五万柱もの遺骨が故国へ戻ってきていないことに心が痛みます。北の冷たい大地に、南のジャングルに、いまなおどんな思いで眠っておられるのでしょうか。激戦の硫黄島では、二万余りの戦死者の、まだ六割の遺骨が灼熱の洞窟の中で、そのままになっています。

国家が始めた戦争で国のためにたったひとつの大切な命を失った方々の遺骨は、かなう限り故国に戻っていただかなければなりません。それは国の責任です。わたしたち生き残った者の責任です。そのためにわたしたちは全力を尽くすことをお誓いいたします。

今日の世界では、なお民族や宗教を背景とする紛争が絶えることなく続いています。核の脅威、テロの脅威にさらされています。

しかし、わたしたちは生き残った者の責任として、永久平和へのたゆみない歩みを続けなければなりません。最大の核保有国である米国のオバマ大統領が昨年四月、プラハで「核兵器のない世界」をめざす演説をしたことは画期的なことでした。今年八月六日の広島原爆の日には、潘基文国連事務総長が参列いたしました。「地位や名声に値するのは核兵器を持つ者ではなく、これを拒む者」だと述べ、「核兵器のない世界」の夢の実現を語りました。

世界はいま、わずかながら、戦争のない世界への希望の灯がともったように思われます。その灯をさらに輝かせること、それに向けてわが国が一步一步努力していくこと、それがさきの大戦の戦没者の遺志を継いでいくことにほかならないと思います。

時はともすると、人々の記憶を奪ったり、惨禍を美化したり、真実を覆い隠したりします。今日、この日は、日本国民がああ戦争の歴史を忘れ去ることのないように、そのためにあるのです。

日本国憲法の平和の理念を改めて胸に誓い、戦没者の御霊の安からんことを祈って、追悼の言葉いたします。

【沖縄全戦没者追悼式】

○沖縄全戦没者追悼式 衆議院議長追悼の辞（平成 22 年 6 月 23 日（水）、沖縄県糸満市平和祈念公園）

本日ここに、沖縄全戦没者追悼式が挙行されるにあたり、謹んで追悼の言葉を申し上げます。

65 年前、沖縄の地で激しい地上戦が繰り広げられ、多くの方がいのちを落としました。ここ、平和祈念公園の「平和の礎」には、民間人や軍人、敵味方、国籍の別なく沖縄県民約 15 万人、県外国外を含め 24 万人余の戦没者のお名前が刻まれております。お一人おひとり、無残にいのちを断ち切られて、それぞれどんな思いだったろうと想像するとき、わたしは胸にこみあげるものを禁じえません。

わたしと同じふるさと、ことのほか多くの北海道出身の兵士も沖縄で眠っています。

年々、戦争を肌身に知る世代が少なくなっていき、ほとんどが戦争の記憶のない世代になっていくとき、わたしは平和の大切さを語り継いでいく、ますます重い責任を感じるのです。

いま沖縄には、米軍基地の 75%が集中して存在しています。私たちは、本土よりもはるかに重い負担を沖縄のみなさんに担っていただいていたことに、申し訳なく思っていました。占領下であって、「銃剣とブルドーザー」によって、沖縄の基地がつくられた歴史を思い出さないわけにはいきません。

本土復帰 38 年、日本国憲法の平和の理想のもとに、何としても、沖縄の基地を縮小し、沖縄のみなさんの負担軽減に向けて、政治が、具体的成果をあげていかなければなりません。いくたび政権が変わっても、沖縄の負担が変わらなければ、これはヤマトーンチュとウチナンチュの差別だと受け止められても申し開きようもありません。沖縄の青い海、青い空、さんさんと降り注ぐ太陽の光の下に立って、私は改めて真剣な努力を誓いたいと思います。

私たちが取り組むべき課題は、多くあります。普天間基地の移転について、この間、沖縄の心を振り回した経過は、遺憾に思うところであり、衆議院を代表する私の立場からも、大きな責任と課題を感じております。

衆議院はすでに沖縄県民の筆舌に尽くし難い米軍基地の過重負担について、在沖縄米軍基地の整理、統合、縮小、移転について、全力で取り組むことを決議しています。

日米地位協定は一度も改正されないまま 50 年が経過いたしました。

刑事裁判権や捜査権をめぐる問題などは、もはや運用改善ということでは解決できません。抜本的改正が必要であります。

安全保障上の国際環境も刻々と変わっていきます。さきの日中首脳会談で、両首脳の間ホットラインが設けられることが決まりました。また防衛当局間でも海上の連絡メカニズムのためホットラインの早期創設についても一致したところです。

「命（ぬち）どう宝」、ひとびとがいつくしみあって暮らす、長生きをことほぐ島沖縄は、お互いがお互いを疑う「抑止力の島」ではなく、「平和を発信する島」にふさわしいのです。本日、私は戦没者の魂安かれと願うとともに 65 年前の戦没者が私たち、生きているものに願ってやまないこと、「永遠の平和」のためにがんばることをお誓いして、追悼のことばといたします。